

〈講義・研究ノート〉

## 投下労働量分析と唯物史観の統合

深澤 竜人

はじめに

筆者はここ数年来、「投下労働量分析」という分析と研究を続けてきた。投下労働量分析とは、簡単に言えば、主として生産過程で行なわれる投下労働量(「投入労働量」といってもよい)を分析の中心に据えて、検討していくものである。ある製品を生産・産出する際、どの程度の労働量(単位は時間)が必要であったのか、どのくらいの労働が費やされたのか、あるいは同議だが、どの程度の労働を投下・投入することによってその製品は生産されたのか、あるいは産出されていくのか、そうした追究と対象が分析の中心課題であり、また基幹的な事項である。

こうした分析と研究を数年間志向し継続していった中で、自身が進めた分析の展開と一定の研究結果を、一つの形でまとめ上げたものが、拙稿「投下労働量分析の発展と展開」<sup>(1)</sup>であった。その後も、引き続きこの投下労働量分析を行なってきたのだが、こうした研究の中で次のような思索に至ることができた。

この投下労働量分析は唯物史観との親和性・親水性が非常にある。両者を融合・統合する形で、さらに発展できるのではないか。このような認識と理解に至ってきた。よって本稿では、投下労働量分析と唯物史観との発展的な統合を示していくこととしたい。

### 第1節 唯物史観の一般的な理解

まずは唯物史観の一般的また共通的な理解と

確認、最初にこれから進めていくこととする。

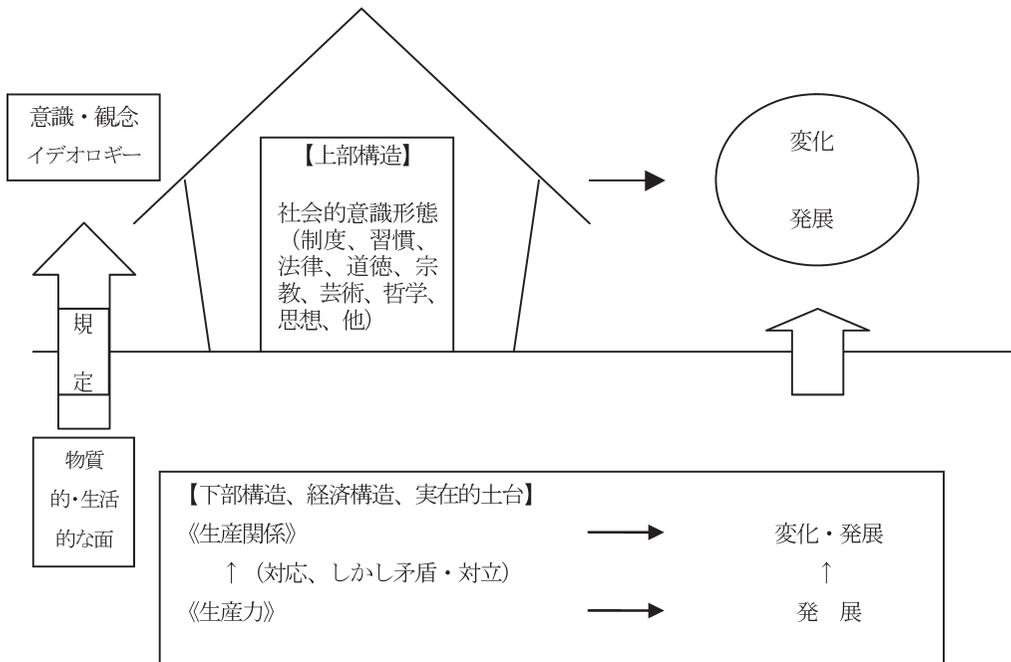
唯物史観(ドイツ語〔本節では以下同じ〕: materialistische Geschichtsauffassung)は、別名「史的唯物論(historischer Materialisms)」ともいわれる。周知のように、マルクス(およびエンゲルス)によって提示されたものである。その出所と文献については、有名すぎるほどであるが、例のマルクス『経済学批判』の「序言(Vorwort)」である<sup>(2)</sup>。有名なものであるから、多くの読者にとっては原典および原文も周知のことであろう。その原典・原文もさることながら、また原文を逐一挙げての検討もさることながら、本稿では便宜上、図解して把握・確認していった方がよいと考え、以下のような概略図を作成してみた<sup>(3)</sup>。(以下、次ページの図1-1を参照。)

### 1. 生産力と生産関係

まず人間は、生存のためには、自然に働きかけて生活に必要な物資を生産し、それを消費しなければ生存していけない。これは有史以来変わらぬ、そしてまた未来においても同様であって、いわば万古不易の事象である。

この不易の事象の中に我々はいるのだが、しかし生産力の水準を歴史的に考えた場合、過去からずっと変わらない同じ生産力水準に、人間と人間社会が定在してきたというものではない。必然的な欲求として、人間は豊かさを追い求め、そのために生産力を高める方法を模索し、その活動を行ない、そして実際に生産力の水準を高めてきた。結果として歴史的に見れば、生

図 1-1 唯物史観の概略図



産力の水準は明らかに低いものから高いものへと発展し進展してきている。

生産力が発展すると、どういう変化がそこに生じてくるのか。生産力が発展すれば、そこで取り結ばれる関係、つまりは生産関係に変化を及ぼさないわけにはいかない。生産力の場合と同様に、我々はまた過去からずっと同じ生産関係の中にいるわけではない。生産力が発展すれば、その発展に応じて、ある種のまた様々な生産関係が取り結ばれる。そして、新しい生産関係へと移行していかないわけにはいかない。あたかも人間が成長とともに、古い衣服は成長すれば体躯に合わなくなり、着用・使用に耐えず脱がれ、新たなものが必要となるように。

このように生産力と生産関係の構成の上で、これが基盤・基礎となって、後に見るように一定の社会が様々に構成され、また編成されてきた。変化・発展してきたともいってよい。長期的に安定と隆盛を極めたものであっても、その

社会に合わなければ、下記のように時代とともに、やがて新しいものにとって変えられていくものである。

## 2. 下部構造、経済構造

以上のように、生産力とそれに対応して取り結ばれる生産関係こそを、唯物史観では経済構造 (ökonomische Struktur der Gesellschaft) と捉えている。そして同時に、この経済構造こそが、上記見てきたように、何よりもまず、社会存立の基盤である。そして、以下述べるように変化はするものの、人間が存在していく実在的な土台 (reale Basis) をなしている。図で表記したように、これが家々々の構築物 (上部構造) を支える下部構造にあたるのである。

家屋などの構築物としての上部構造は、現実に目のあたりにして見て取ることができる。しかし、それを支えている基盤としての下部構造はなかなか実際、人の目には見えづらい。しか

し下部構造がしっかり存在していなければ、上図のように家々等々の構築物は存立できない。つまり、上記のように、下部構造としての経済構造が時代時代を支えている基礎・基盤といえるのである。

### 3. 上部構造

この下部構造としての経済構造を土台・基礎にして家々が立つように、この上にその時代時代に即応した一定の上部構造が存立する。一定の法律的・政治的上部構造 (Ein juristischer und politischer Überbau、また社会的意識形態 bestimmte gesellschaftliche Bewußtseinsformen) とも原典にはあるが、これが形成され、存立するのである。

こうした認識と把握に立てば、生活に必要な物質的な生産様式、つまりは下部構造、これが社会的・政治的・精神的な生活過程一般を形作っていく基盤でもある。またそれらを制約するともいえる。換言すれば、よくいわれることだが、人間の社会的存在が人間の意識を規定していると唯物論的に把握できるのであって、観念論的に意識が存在を規定しているのではない。

### 4. 下部構造の変化

すでに指摘しておいたとおり、上部構造はもとより、下部構造もまた万古不易にして変わらぬものではない。あらゆる事象がそうであるように、事象は不変ではなく、変化し発展していく。多かれ少なかれ他とのつながりを持ち、様々な因果関係の中で、弁証法的に矛盾と対立そしてその相克を繰り返し、しかしその中で、それを乗り越える形で、変化・発展していく。上部構造・下部構造にしても、しかりである。ではその変化・発展のプロセスはどう捉えられるのか。

下部構造である社会の物質的な生産力は、長期的にまたある一定の時期、既存の生産関係(法

的表現でいえば所有関係)の内部で、はぐくまれ発展してきた。生産力と生産関係がうまくこと対応してきた時期が存在する。そこには問題がなかったわけでもなく、矛盾し対立する状況はあったであろう。矛盾し対立する要素があるから、事象は変化し発展していく。しかしその矛盾・対立はある時期までは、およそ既存の旧来の生産関係の枠内で収まっていた。

しかし、さらに生産力が発展し、臨界的な段階にまで至ると、どうなるか。既存の生産関係(所有関係)は、かつて生産力を包含し対応してくれていたのだが、生産力がさらに発展してくれば、だんだんと既存の旧来の生産関係とはさらなる矛盾・軋轢が生じるようになってくる。新しいものに取り替わって代わる時期が訪れてくる。かつて、既存の生産関係・所有関係が、生産力を内包し、はぐくみ発展させてきたのだが、ある段階に至れば、そうした収まりがついていた状況から、既存の生産関係・所有関係は生産力の発展自体を阻む桎梏へと変わっていくといえる。既存の生産関係はいわば邪魔な外皮となって、それを脱ぎ捨て脱皮しなければならない時期があるのと同様に。また別に例えるなら、あたかも水(「生産力」)は、鉄瓶(水にエネルギーを与える「生産関係」)で沸かされるが、やがて水が沸騰して気体・水蒸気となると、鉄瓶という外枠が邪魔な存在になるように。

### 5. 上部構造の変化

生産力によって生産関係が変化し、つまり下部構造がこのような状況にまで至れば、社会な革命・変革の時期が訪れてくる。基礎である下部構造・経済構造(生産力と生産関係)が上記のように変化してきたのであるから、上部構造がいかに巨大であっても、徐々にせよ急激にせよ、上部構造自体が変えられていく。そうしなければ収まりがつかなくなるように。上の例でいえば、熱によってエネルギーを増してきた水

は、もはや液体ではなくなり、エネルギーを増して気体というものに状態変化しており、鉄瓶に例えられた旧来の生産関係の中では取まりがつかなくなって、鉄瓶という外枠がもはや邪魔になる。そして新たな定在の場を求め、そこに適合していくように。あるいはまた、蛹がやがて孵化していくようなものと例えてもよい。

このように下部構造が変われば、上部構造は変化せざるを得ない。旧来の家々の土台（下部構造）が崩れてしまい、新しいものになったのであれば、その上に構築された諸々のもの（上部構造）は変わらざるを得ない。先に上部構造に入るものとして、社会的意識形態（制度、習慣、法律、道徳、宗教、芸術、哲学、思想、他）、また全文化構造、あるいは意識・概念・イデオロギーを挙げたが、そうした人間が作り上げたものは、時代の変化とともに、あるいは時代に合わせて変わっていくものである。後に触れるが、封建時代には封建時代の、その時代にふさわしい制度、習慣、法律、道徳、宗教、芸術、哲学、思想、他が、あったのである。しかし、封建制が終わりを告げ、近・現代の資本制・資本主義の時代になれば、旧来の制度、習慣、法律、道徳、宗教、芸術、哲学、思想、他は、すべてがそうだとはいわないまでも、その多くはあるいはほとんどのものは、時代に合わなくなっていくのと同じである。このように下部構造が変われば、上部構造は変わらざるを得ないのである。

以上のように、物質的生活の諸矛盾、あるいはまた社会的な生産力と生産関係との間、つまりは下部構造（経済構造）に現存する矛盾と衝突は、上部構造としての社会の変化をもたらし、新たなものが構成され編成されていく、その状況を上述の観点で説明し、見ていくのが、唯物史観の特徴である<sup>(4)</sup>。

## 6. 経済的社会構成の諸時期、年代区分と生産関係との対応

以上のような経済的に見た社会構成の一連の時期（progressive Epochen）として、マルクスは同一のセンテンスで、大づかみに、アジア的、古代的、封建的、近代ブルジョア的生産様式として挙げる事が可能だとしている。

それをさらに歴史的な時代区分で対応させていく（【時代】で標記していく）と、【原始】共産制、【古代】奴隷制、【中世・近世】封建制、そして【近・現代】資本制、資本主義社会・経済として、対応させることができる（次ページ表1-1を参照）。そしてさらに、その時代区分で取られていた生産関係（階級関係・支配と被支配の関係）を見ていくとすれば、同表のように唯物史観では捉えている。およそ歴史の教科書的な概説区分でも、このような区分と編成がなされ、上記の各時代区分で一線が引かれ、また編や章が改められている。

## 第2節 唯物史観への批判

こうした唯物史観に対して批判は無論多数ある。また、その批判に対する反論もまたなされている。この節では、唯物史観に関する代表的な批判や反論から確認していきたい。

唯物史観への反論・批判は多数あると指摘したが、唯物史観は学術的な内容であるとともに、歴史観でもあるため、歴史小説などからも反論・批判が聞かされる。このように、各分野・各方面から陰に陽に聞かされるどころであり、散見するままそれを挙げていくとすれば、

①. 唯物史観は歴史的変動要因を、経済にすべてを還元しすぎている。経済一元論的な主張だ。経済から、下部構造から、すべてを説明することは到底できない。例えば、社会的な変化あるいは戦争などが起こる要因は、到底経済だけからの説明では不十分であろう。

表 1-1 唯物史観における時代・制度・生産関係の相関

【時代】	【原始】	【古代】	【中世・近世】	【近・現代】
経済・社会制度	共産制	奴隷制	封建制	資本主義制度
生産関係・階級関係	存在せず 貧富の差なし	王・奴隷主 vs. 奴隷	国王・諸侯・武士 vs. 農民・農奴	資本家・会社 vs. 労働者
代表的な時代・地域 《世界史》 《日本史》	旧石器時代 縄文時代	エジプト～ローマ世界 古墳～平安時代	ヨーロッパ世界 鎌倉～江戸時代	産業革命後 明治維新後

②. 下部構造から上部構造へ、ではなく、上部構造が下部構造にも影響を与えるはずだ。その時代の精神構造やら宗教、唯物史観という上部構造等々として、歴史変革の際に大きな役割を果たすものである。その点を軽視するきらいが、唯物史観にはある。経済・物質的な面からの規定・把握だけではなく、時代を率いる人物のカリスマ的な要素として、決定的なものである。

③. 時代と歴史を表 1-1 のように直線的また単線的に、さらには単純に見ることはできない。多くの紆余曲折があったり、また時代的な飛躍も存在する。現在、地球上の全世界すべてが、近・現代の資本主義制度の中に居るわけではない。いまだ未開民族のように、原始的な生活を送っている部族等々が現にいる。

④. こうした歴史的な発展と同時に、地域的な差をどう見るか。特にヨーロッパで発展した中世封建制が崩れ、その中から近代資本主義が登場してきたのは解るとしても、古代奴隷制で隆盛を極めたエジプト・ギリシャ・ローマがいついえて、そこからすぐ直線的あるいは単線的に封建制度が生れてきたのではない。また、西洋と東洋、ヨーロッパとアジア、これらの違いもあるだろうし、さらに中東イスラム圏あたりの社会経済体制をどう捉えるか。唯物史観では説明がつかないのではないか。

およそ、これらの批判・反論がある。

上記マルクスの『経済学批判』の「序言」が

出されたのが、1859年であった。それを直接批判し反論する形ではないが、唯物史観への批判・反論を匂わす世界的に有名な文献としては、マックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理とその精神』（初出は1905年）や、ウォルト・ロストウ『経済成長の諸段階』（1960年、この副題は「一つの共産主義宣言」で知られている）、などが挙げられよう。日本において有名なものとしては、小泉信三による批判と論争があるし<sup>(5)</sup>、向坂逸郎『マルクスの批判と反批判』（1958年）の第一・二篇にて、唯物史観等に関する批判と反批判によって検討がなされている。また有名な歴史小説家、司馬遼太郎の著作の中でも、唯物史観に関するいくつかの反論・批判が聞かされる場所である<sup>(6)</sup>。

### 第3節 唯物史観の意義

このように唯物史観に対する批判は多数あって、またその批判に対する反論もまたなされている。無論完璧なものがないのと同様に、ある論理・理論に批判・反論はつきものである。なかつたらその論理・理論そのものが、検討するに足りないものということだろう。先の弁証法的にみれば、批判と反論の中で、切磋琢磨され、発展していくものだともいえる。本節では前節の批判のいくつかに答える形で、この唯物史観の一定の意義について、以下指摘していく

こととする。

### 1. 観念論からの脱却

唯物史観の意義として、一つには、やはり観念論的な歴史観ではなく、その反対の唯物論的あるいは物質的、または現実的な視点で、歴史が把握され貫通されている点が、特筆される点であろう。簡単にいえば、生活に即した視点といってもよい。観念論に対する唯物論的な歴史観と示したが、観念論的な歴史観としては、理性・悟性・精神というような事象を基本に歴史が作られ、また今までの歴史を説明する見方であろう。しかし唯物史観はそうではない。前節で見てきたように、全く逆である。人間は生きていくためには、衣・食・住を基本として生活していかなければならないのであり、そのためにはどうするか、どのようにしてそれをまかなっていくか、そこから出発して、こうした生活の基本である生産力と生産関係に根本を求めている。人間の衣食住など物質的・基本的な生活が確立された上で、理性・悟性・精神等々の観念的な事象が上部構造の一部として成立するとの見解に立つ。

唯物史観は、経済がすべてを決定するというような経済一元論、また経済動向にすべてを帰していく経済還元論的なことを主張しているのではない。人間が生きていく基本に衣・食・住があり、それを生み出していく生産力と生産関係に根源的基盤を見ているのである。

さらに簡単にいえば、「どうやって食っていくか、生活していくか」「そのためにはどうするか」というのが、人間生活における何よりも基本にして先決事項であり、その点を根本におくものである。あるいはまた、「単なる精神論では食べていけない」ということである。食っていくためには、その時代の生産力に応じて、社会の支配的・主流的そして世界的にもおよそ共通な生産関係が存在し、それを人はどのよう

に取り結び、人はその中でどのように交流し合うか、この点を基本におく。単に、精神等々、抽象的かつ摩訶不思議にして捉えようものないもの、あるいは非科学的なものを重視しない、即物的あるいは現実的な視点で歴史認識を深めていく立場となる。

### 2. 宗教からの脱却

となれば、第二のさらなる意義として、次の点も派生してくる。精神的な支柱としての宗教、これも唯物史観では人間が作ったイデオロギーとして、上部構造の一部に含めている。神が天地をそして人間を創造したという宗教観・世界観・歴史観から完全に脱し、神も宗教も人間の精神的あるいは観念的な産物であり、それもまた時代とともに変化し発展していくものだと、唯物史観では捉える<sup>(7)</sup>。

神という超越的な存在が、人類と人類社会を創作したのではなく、あくまで人間が精神的に（前項との関連でいえば観念的に）神をイメージし、あるいはそれを偶像的に創作し、またその教義を体系化し、宗教としてまとめている。唯物論ではおよそこのように神や宗教を捉えるため、そうした認識からすれば、歴史の動きに関しても、神のように現実を超越した存在が歴史を作った、神によって導かれている、のではなく、逆に人間がその時代の生産力に即応した衣食住等の物質的生活が充足した後、精神的な余裕からいわば文化的に、神や宗教を生み出したものだと捉える。

神や宗教は人間の精神的産物であって、上部構造の一部であるから、それらは他の上部構造と同様に歴史とともに変化し発展していく。例えば、かつてはアニミズムやトーテミズム的な要素から、あるいは呪術的な要素をかね合わせた形で、原始宗教が発生したが、今ではそうしたものが人々の精神的な支柱となっているとはいいがたく、科学的には退けられ、全部とい

かないまでも多くは姿を消し、形を変えていった。このように、宗教・神、そうしたものも時代とともに変化していくものと捉えている。やがてその後、アニミズムやトーテミズム的なものとは別に、現代につながる大衆的な三大宗教等々が生れてくるが、それらにしても起こった当時の教えや開祖の教義をかたくに固守し、一節も違えずに墨守するというよりも、教えや教義さらに修行方法にしても、それらは時代が進み科学が発展していく中で、単純なアニミズムや偶像崇拜は今日非科学的なものとして認識されているように、時代時代に合わせて変化しているようである。

このように宗教等々であっても人間の産物（上部構造）であり、それは不変にして不易なものではなく、歴史的に変化していくものと捉えられている。であればこそ、歴史はある預言書やある宗教的な經典書などに書かれてきたように進んでいる、またはすでに何々に拠って創られている・予言されているというプロパガンダ的な断言や歴史観は、全くの流言か妄言の類のものとして捉えられるであろう。

### 3. 英雄史観からの脱却

歴史は神やある預言や聖典などに依拠できないものであることからすれば、さらに、ある英雄視された者によって作り出されたもの、あるいは小説風にある一人の英雄的存在が活躍して新たな時代を創った、唯物史観はこのような史観でもないことが、解ってこよう。

確かに歴史のターニングポイントにあたって、あるカリスマ的な者がリーダー的存在となって大衆を率いて、その結果、新たな政治・統治機構を起し、新たな歴史が始まっていくことはあろう。確かにそうした新規な指導力は無視できないものかもしれない。しかしそれは、その人物とその人物が目指す政策を、大衆が推したということの方を、唯物史観では大きな要

因として捉えていく。前に見てきたように、人間は生産力を発展させ、その結果、新たな生産関係を求めていく。唯物史観では、この下部構造の変化に、歴史の推移と歴史転換の原動力を見ているのである。下部構造や土台が変化すれば、あらたな上部構造を構築していく人や力が必要になるのであって、そうした人と力を時代と大衆が求めるものである。その中から才覚ある人物は、いわば自然発生的に時代の寵児となって輩出されてくるか、そのような人物は囊中の錐の如く、頭角を現して出てくるころであろう。

前項とのつながりでいえば、ある神にも似た英雄的な人物の存在が、天才的な力量をもって、歴史を変えるために現れて来たという、宿命的・物語的解釈を採らない。唯物史観の視点はその逆で、時代が・大衆が新たな時代や生産関係、あるいは新たな政治・統治機構を求めていたということの方を、根本・根底に見て、それを探っていくのである。

### 4. 民主政治との融合

この経済・社会が神や宗教に支配されているのではなく、予言などによって決められたものではないとすれば、そして今までの歴史がそうした形で捉えられるとすれば、唯物史観からさらにいえることは、社会は人類が作ってきたものであり、そして人類の手で大衆の適した形に作り返られる、ということになってこよう。

さらに、今日、民主的に発展してきた政治形態下であれば、社会を上部構造を、大衆のために適した、新しい民主制的にふさわしい上部構造に変革していくことが、逆に望ましいこととなる。かつての封建的な道徳としてふさわしかった上から（あるいはお上<sup>かみ</sup>から）の意のままになるような意識や制度、これらは今日封建的遺制となっている。また今日社会は超越的な存在によって支配されているものではない、という

ことが明らかになってきた以上、一人一人が主体的な人格者となって、そして民主的な政治参加によって、大衆にふさわしい形態に上部構造を作り、作り変えていくことが、唯物史観から提示されてくる一つの規範となってこよう。

こうしたことが主張できることが、本稿で挙げられる唯物史観の第四の意義とする。

## 5. 新たな社会・生産関係の存在の可能性

最後に、今までの歴史がかような形で捉えられるとすれば、人類史はこれで終わりではないということになる。それは当然といえば当然であろうが、さらに敷衍すれば、人類史は近・現代の資本主義制度で終わるというものではないということになる。

表で1-1でも見てきたように、各時代に始まりがあって、同時に終わりがあった。それは不易なものではなかった。そしてまた、各時代時代には、そこに適した生産関係があった。それはその時代とその時代の生産力から、いわば必然的に生み出された、時代に適合したふさわしい形態であった。しかし、それが未来永劫繁栄し、永久に続くものでもまた決してなかったのである。他の事象と同じで、始まりがあって、変化して、そしてやがて終焉を迎えたのである。

それと同時に、この近・現代の資本主義制度とて、未来永劫繁栄し永久に続くものでは、決してないであろう。中世の封建制度とて、およそ1,000年くらいのスパンで発生と終焉を迎えているのであるから、近・現代の資本主義制度とて、安易な未来予想はできないが、少なくとも永久に永遠にこの制度形態が続くという類のものではないはずである。事実、19世紀に生れた資本主義制度そのものに、我々は今日居るわけではない。当時の代表的な生産関係（資本家 vs. 労働者）の姿とて、19世紀のまま不変に留まっているのではなくて、今日に至っては大きく変化しているではないか。まさに唯物史観

のいうように、変化・発展しているのである。

とすれば、この資本主義制度とて、過去の制度と同様に、始まりがあり、そして変化し、やがて終焉を迎えていくはずの類のものである。資本主義制度だけがその例外であるはずはない。となれば、この資本主義制度の次の制度があるはずである。これは三次元があってその次の四次元があるというような、いささかSF的な話とは違う。過去の歴史から考察して、以上のようにいえるということである。逆に、今までの歴史と論理からして、資本主義制度にせよある制度が、未来永劫不変に続くとする方が、ナンセンスではないか。

すでに示したロストウの批判のようにテイクオフの形の主張を取り、その後工業化社会での定常状態という主張も聞かされたが、それだと人類史の発展はそこで終わってしまう。かつての歴史を見て解るように、隆盛を誇ったローマ帝国やわが国においては江戸時代等々においても、その頂点に住んでいた人たちにすれば、おそらくこれが最高の形態、これ以外に発展した形態の制度は、考えられなかったことであろう。しかし、それも今日から見れば、完全な歴史的な遺制である。人類はそれを超えた新たな体制を生み出し、今日的段階に来ているのである。やはり形を変えて変化し、発展していくという性格のものとして捉えた方が自然であろう。

この資本主義制度の終わりはいつで、どう訪れるかなどという、単純な未来予想や、安易な予断は許されない。しかし、以上のことは唯物史観の観点をもってすればいえることであろう。これを本稿における唯物史観の意義として最後に示しておく<sup>(8)</sup>。

## 第4節 投下労働量分析との統合

以上唯物史観に関して、意義と批判を加えながら詳解・検討してきた。本節ではさらにこれ

らを下地としながら、本稿の主題である投下労働量分析との考察を導入して、両者の発展的統合を示していくこととする。

### 1. 必要労働と剰余労働の峻別

第1節の唯物史観の概説でも触れてきたように、人間は生きていくためには労働を行わなければならない。労働を行なうことによって、人間は動物界から分かれ、人間社会が発生し、そして形成されてきたともいえる。

さてその労働および労働量を、投下労働量分析では「必要労働(量)部分」と「剰余労働(量)部分」、この二つに分けて考察していく。必要労働というのは、総労働のうち、個人(または家族や集団でもよい)が、生活を維持するために必要な物資(「必要生産物」)を生産するための労働部分である。対して剰余労働部分とは、総労働のうち、上記必要労働部分以外の労働で、必要生産物以外の剰余生産物を生み出す労働部分となる。

式で表した方が解りやすければ、

$$\text{総労働(量)} = \text{必要労働(量)} + \text{剰余労働(量)}$$

$$\text{生産物} = \text{必要生産物} + \text{剰余生産物}$$

となる。

このように投下労働量分析では、労働がこの二者から構成されていることを重用視し、全労働をこの二者に分割して分析・検討していくことになる。この分析を既述の唯物史観と噛み合

あわせて検討していくことにより、以下の把握と展開が可能となる。

### 2. 原始共産制の場合

まず原始共産制の場合から見ていく。この社会形態においては、生産力は極めて低かった。簡単な打製石器などの道具があっただけである。経済は狩猟・採集を中心とした獲得経済である。農耕・牧畜などによる生産はまだ始まっておらず、行なわれてはいない。

生産力が極めて低かったことから、上記投下労働量分析による労働の分割では、行なわれる労働はすべて必要労働と把握できる。剰余労働部分(またそこから生み出される剰余生産物部分)は生じていない。僅かに生じていたとしても、後に見る社会と比較した場合、極めて僅少である。

これらを図4-1で示してみよう。以下のように示すことができる。(アルファベットのA以下は、個人、家族、集団、いずれとしてもよい。記号の隣の枠で、労働の種類と量〔単位は時間でも日でもよい〕あるいは生産物を考えてみる。)

図4-1の意味するところは、この社会における労働のあり方、そして労働から得られる生産物に関する概略、さらにまたそれらから生じる生産関係や社会の存在・存続形態である。

まず、この社会における労働のあり方とそこ

図4-1 原始共産制における労働・生産物の性格

A	必要労働 (必要生産物)
B	必要労働 (必要生産物)
C	必要労働 (必要生産物)
D	必要労働 (必要生産物)
E	必要労働 (必要生産物)

生産関係

A B C D E

から得られる生産物に関して見ていく。この社会においては、行なわれる労働は、（一日あるいは長く取って一年単位で考えてもよいが、）既述のように、生産力水準が極めて低かったことにより、何しろほとんどが必要労働となる。よって得られる生産物も、必要生産物のみとなっている。剰余部分は労働・生産物ともに生じていない。これらのことを図4-1は示している。つまり、生産力が低いことから、行なわれる労働は、必然的に必要生産物を生み出すだけの形、または必要生産物を稼ぐだけの姿となる。よって剰余部分は生じる余地がないのである。こうした生産力水準と労働形態、これがこの原始共産制社会における労働のあり方と、生産物獲得の状態と状況である。

とすれば、次にそこで取り結ばれる生産関係はどのような形態となるか。生産力と生産関係によって社会の下部構造は形成されると、第1節の唯物史観の理解で把握したが、こうした必要生産物を生み出すだけの生産力水準であれば、本節で対象とした投下労働量分析の観点と合わせて、ここで取り結ばれる社会編成なり生産関係はいかなるものとなるか、ということである。

まず、生きていくためには何らかの形で働かなければならないことを述べたが、その労働のあり方は、既述のとおりすべて必要労働であった。次に、生活のためには、労働で獲得した生産物を分配して消費しなければならないのだが、既述の必要労働から獲得した生産物（すべてが必要生産物）は、A以下の家族にせよ集団にせよ、その中で皆平等に分配され消費しつくされてしまう。剰余部分は生じていないか、生じていたとしても僅かであったため、その剰余部分もまた同様に、Aの中で分配・消費されてしまうか、他のA・B以下の共同体間で交換・分配、そして消費されていく。

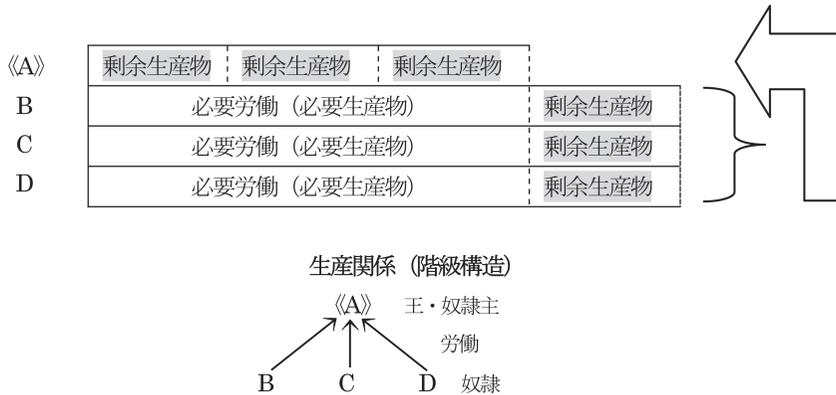
つまりこのように必要生産物を稼ぎ出すほど

の生産力水準であれば、いわば“その日暮らし”に近い労働・生活形態である。剰余部分は繰り返すが、ほぼ存在できていない。そうした労働・生活、そして社会形態であれば、そこにはリーダー役くらいの存在はいたろうが、それを超えた（後に見るような）いわゆる階級関係、支配し・支配される関係、あるいは図4-1でいえばAがB以下の剰余生産物や剰余労働によって支えられるという関係、貢ぐ・貢がれるという関係（これらも後述）、これらは発生していない。というよりも、発生する余地や基盤すら存在できていないのである。生産力水準が極めて低く、剰余生産物すらも獲得できていないという状況と水準であれば、このような形態とならざるを得ない。

よって、その社会においては階級関係、支配し・支配される関係、よくいわれる貧富の差はなく、AからEに至るまで上下関係はなく、いわば横一線に並んだ関係（図4-1の生産関係）になるということが理解できよう。唯物史観あるいは歴史学でも示されるように、生産関係は原始においてはこのような共同体関係になり、上記のような投下労働量分析による必要労働と剰余労働の観点、そしてこの社会における生産力水準から剰余労働・剰余生産物が発生していないという状況、これらの点を噛み合わせていくと、そこに階級が存在せず、貧富の差がなく、皆平等な関係であったという点は、より理解・認識が深まるであろう。

これを人類は原始において長年続けてきたわけである。だが、第2節で述べたように、生産力を高めるあくなき追求が存在する。人類はやがて農耕というものを開発していった。この農耕という生産力の発展によって、どういふ変化が上記の図に生じ、社会がどのように改変されていくか。投下労働量分析と唯物史観に拠れば、それは以下のように捉えることができる。

図4-2 古代奴隷制の労働・生産物の性格



### 3. 古代奴隷制の場合

この図4-2は、前の図4-1との対照で、次のことを意味している。原始の頃は、一日の例えば8時間すべて働いて、(8時間の労働時間をすべて投下・投入して、)生活に必要な物資(必要生産物)が獲得できていた。同義だが、それだけ働かなければ生活に必要な生産物は獲得できない状況であったのである。が、生産力が上昇するとどうなるか。今までのように8時間働かなくとも、必要生産物は獲得できるようになったわけである。

よって、ここから必要労働時間は、例えば6時間くらいに短縮し低下するであろう。ただ今までどおり8時間働けば、今までのいわゆるカツカツの生活から、ゆとりや余裕が生じてくる。ここから、いわゆる剰余生産物が生み出されてくる。8マイナス6の2時間、これが剰余労働であって、生産力の上昇によってこの剰余労働が可能となり、さらにこの剰余労働によって、この社会において剰余生産物が生み出されてくるわけである<sup>(9)</sup>。投下労働量分析で見れば、生産力の上昇によって、労働の形態と性格および内容がこのように変化する、その状況が鮮明になるのだが、さらに重要な次の変化も生じてくる。

この社会において剰余生産物が発生してきて

いるということは、Aは自ら直接労働しなくとも、何らかの形でB・C・Dが働いて生産してくれた剰余生産物を、Aに買いでもらえる関係が成立するのであれば、Aの生活は支えられるようになってきていることを意味してくる。こうなると社会は明らかに、前図とは別の様相を呈してくる。

その様相とは、一方では労働を投下して働き、同時に必要労働以上の剰余労働を行ない剰余生産物を生み出していく者(階級、例えば図4-2のB・C・D)、その一方では自身は労働せずとも前者が生み出した剰余生産物を取得できる者(階級、同じくA)、こうした社会・階級編成がここで可能となっているのである。このようにして、唯物史観でいうところの、新たな生産関係が発生してくるわけである。

それを可能にさせている前提にして基礎なる条件は何か。再考してみると、それは明らかに生産力の上昇であって、必要労働の低下であり、さらにそこから生じた剰余労働と剰余生産物の存在であった。こうした生産力の上昇、必要労働の低下、剰余労働・剰余生産物の発生と存在、これが新たな社会そして新たな階級編成を可能にした基礎・基盤である。

ちなみに、前図4-1と対照させてみれば解るように、行なう労働がすべて必要労働部分で

あったとすれば、剰余生産物は発生せず、それを通じた図4-2のような生産物取得の関係やら、貢ぐ・貢がれる、支配・被支配の階級関係は、発生すべくもない。投下労働量分析による必要労働と剰余労働との峻別把握を基礎に確認していけば、以上のように指摘することができる。

そこで生じる生産関係の状況を、第1節の唯物史観で見たものと改めて照合させてみると、どう把握できるか。Aの立場・地位にいる者は、奴隷制の時代であれば王や奴隷主であった。BからDの立場に位置する者は、奴隷ということになる。こうして原始の頃とは明らかに違う、新たな関係に変化し発展し、新たな生産関係が編成されているのである。

さらに生産関係について概観すれば、本節2の原始共産制度の頃のような図4-1に示される横一線に並んだ生産関係では、もはやなくなっている。この奴隷制度下においては、Aが君臨し、統治する関係ができているのである。こうした生産関係（階級構造）を基礎に、第1節の唯物史観の概説で見たように、Aが頂点に立つ様々な制度が可能であるし、またそれを基にたとえ口実であろうとも、そうした生産関係（階級構造）を是とする上部構造が出来上がるであろう。これによって、その時代が築かれていったのである。

しかし、これらを成り立たせ可能にしている前提条件は、繰り返すが、生産力の上昇であって、必要労働の低下と剰余労働・剰余生産物の存在である。唯物史観と投下労働量分析では、以上のように捉えることができる。

こうした社会が、歴史の中では具体的に、古代エジプト・ギリシャ・ローマ、日本においては古墳時代や律令制の頃、この頃を典型として存在した。それは長期的に継続し存続できていたのだが、時代と社会制度はここが終着駅ではなかった。唯物史観で見たように、そしてまた

本節2から3へ移行したのと同様に、生産力を向上させようというあくなき追求から、生産力を飛躍的に発展させる事象が現れた。農耕技術の発展であったと、歴史の教科書などではよく記載される事項である。この農耕技術の発展などによって生産力が上昇すると、図4-2はさらにどのように変化してくるか。それを次に見ていく。

#### 4. 中世封建制の場合

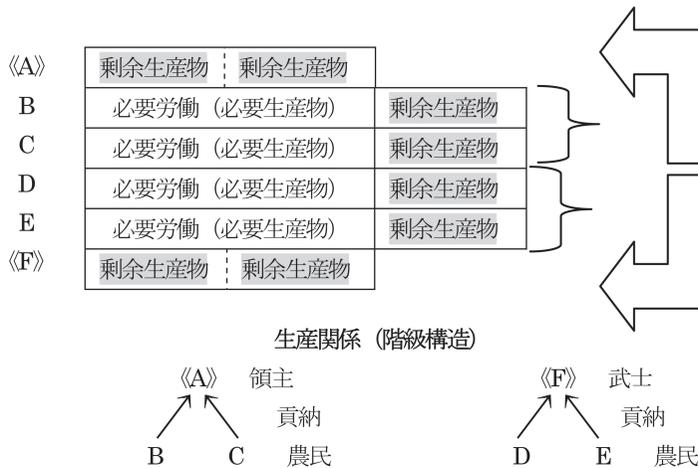
投下労働量分析では先のとおり、生産力の上昇から必要労働の低下と剰余労働の拡大を看取る。図4-2よりさらに生産力が上昇すれば、どうなっていくか。確認していくと、生産力の上昇によって必要労働時間がさらに低下する。本節3の奴隷制度の頃には必要労働は例えば6時間であったのだが、生産力が上昇すれば必要労働はさらに短縮低下する。6時間も働かなくとも、自身に必要な生産物は獲得できるようになるわけである。しかし、旧来どおり8時間働けば、剰余労働が奴隷制度のころよりさらに増加するため、さらなる剰余生産物が獲得可能となる。根本的にこの原理がここでも働く。

すると、このような生産力の上昇と労働の変化は、既述の社会や貢納編成をどのように変化させていくか。図4-2に続いて、以下の指摘が可能であろう。

図4-3（次ページ）を、やはり図4-1・2と比較して見ていきたい。まず、図4-1から図4-2に移行した場合と同様な論理によって、今度はFの存在を生み出している。そればかりではない。かつてのA・B・C・Dのグループは、A・B・Cに編成変えされており、さらに新たなD・E・Fのグループ編成も生み出しているのである。

つまり、図4-2の段階より生産力が上昇し、そこから剰余生産物が増加するという既述の原理を基にして、この社会ではAの生計はもは

図4-3 中世封建制の労働・生産物の性格



やBとCの剰余労働と剰余生産物で支えていくことが可能となっている。のみならず、Aと同様なFの存在も可能となり、DおよびEの労働によってFを支える余地がこうして生じてくるのである。

このように、投下労働量分析で指摘した生産力の上昇から必要労働の低下、そして剰余労働の増大、この原理は、新たな生産関係を生み出し、新たな社会を生み出していき、そしてその移行への根本的条件であることが理解できよう。

再度図4-3を見て解るように、AとFがトップに立ち、BとC、DとEが、A・Fのそれぞれを支えている。その形態とすれば、中世封建制度下においては貢納（日本では具体的に年貢）という形態を取って支えていたのは周知の事実である。

中世封建制における生産関係、その形態と出自および過去からの編成変えの状況は、このように投下労働量分析をもってまず鮮明に知れるはずである。

さらに、本稿第2節で見たような様々な矛盾や対立そして軋轢が、奴隷制度下の生産関係において無論生じていたはずである<sup>(10)</sup>。唯物史観あるいは弁証法では、そうした矛盾・対立こ

そが事物発展の根源であると捉えていた。この矛盾・対立と同時に、唯物史観では基本的に、生産力の上昇が新たな社会への編成変えを可能としていた。この点もまた看過してはならないわけであり、今まで見てきた論理からして、もし生産力の上昇、そして必要労働量の低下と剰余労働・剰余生産物の上昇、これらが存在しなければ、図4-2から図4-3のような編成変えは、そもそもが可能ではなかったのである。

以上のように投下労働量分析と唯物史観は、統合・融合して把握できるのである。

時代はこうした封建制のスタイルが長く続いた。（改めて表1-1を参照。）しかし、始まりがあれば終わりも存在する。かつての奴隷制が崩れ、封建制度がそれにとって代わり支配的・標準的なスタイルになったように、封建制度もやがて終焉を迎えたのである。それを可能にさせたのは投下労働量分析と唯物史観では、以上のように生産力の発展による生産関係の変化に重きをおく。

さて、その移行に際して、生産力を上昇させた歴史的な画期的事象が存在した。いわずと知れた産業革命である。生産力のさらなる発展によって、図4-3はさらにどのように変化して



それによって武士階級は維持されていた。それと同様に、資本主義社会ではその剰余生産物部分は利潤に変わり、労働者が働き会社に利潤を残すからこそ、それにて会社等々が維持されていく。このように労働を行ない、必要労働以上の剰余労働によって何がしかを支えていく。こうした構造は、以前の社会とは基本的に変わってはいない。

投下労働量分析やあるいは労働価値説では、唯物史観の観点と合わせて、資本主義体制下の賃金対利潤との関係を、必要労働（必要生産物）対剰余労働（剰余生産物）の関係と照合させて、以上のように捉えることができる<sup>(12)</sup>。

このように過去からの歴史の中で、変わらないもの・変わったものとの相違が鮮明となる。また、必要労働部分を超える剰余労働部分で利潤は生み出されるという「マルクスの基本定理（マルクス・置塩の定理）<sup>(13)</sup>」があるが、本節のように有史以来の流れと変化を投下労働量分析で照合させていくと、その定理の内容と意味するところは、鮮明となるであろう。

## 6. 総括

以上、唯物史観を基に、投下労働量分析とを照合させて、有史以来を確認してきた。最後に若干の再確認を行ない、総括しておきたい。

本節で示された観点や認識、つまり必要労働と剰余労働の峻別、剰余労働から生み出される剰余生産物の他への供与、それによって維持される生産関係とその編成（階級編成）、これらその時代時代に即応した様々な形態は、社会の存続の基盤や根幹であって、有史以来時代を貫く基本的な一本の線であると見ることができる。

労働や生産活動がなければ社会が存続できないこと、具体的には生活に必要な物資が根本的に供給されないこと、そしてその労働は必要労働と剰余労働に峻別されること、さらに剰余労働から生み出される剰余生産物が他へ供与され

ることによって社会あるいは階級が維持されること。これらは有史以来基本的には変わってはいない。時代を貫く一本の線であるといったのは、そうした意味からである。

変化したのは何であったか。上記見た労働の量的構成、剰余労働から生れる剰余生産物部分の供与・配分・取得における様々な形態と名称であった。その詳細と具体例を本節では図で示し、追究してきた。

このように、歴史および時代区分、その時々社会経済を確認しながら、変わらぬものと変化したところ、これらが鮮明となってきた。

と同時に、さらに歴史を通じて新たな社会経済制度への移行の際、重要なキーポイントになっていたものについても、また明確となった。本稿第1節で確認した唯物史観からいえば、生産力の上昇と生産関係の変化、これがよく指摘される場所である。その点に関して、本節ではさらに詳細に踏み込んでいった。その分析から示されたことは、唯物史観に投下労働量分析を適用させ、生産力の上昇から生じる必要労働部分の低下縮小、剰余労働部分と剰余生産物の増加、この原理を剔抉し、また適用させていった。生産力の上昇から剰余生産物が増加することによって、剰余生産物の供与・取得等々の形態が変化し、そこで社会経済制度が生産関係（階級編成）とともに変化し、新たな社会また時代に即応した社会が構成されていく。これらの関係と状況がまた鮮明となった。

唯物史観と投下労働量分析によれば、このように両者は発展的に統合・融合できるのであって、以上の点がより明確となる。

## 注

- (1) 深澤竜人 [2012]。
- (2) Karl Marx [1859]。
- (3) 本文の図1-1と唯物史観に関する本文の説明は、Marx [1859]（『経済学批判』の「序言」）

を基に、Marx-Engels [1845-46, 1848]、経済学辞典編集委員会編者 [1979]、城塚登監修・倫理社会研究会編集 [1979]、他いくつかのものを参考にした。

(4) 次の注記も重要であるので、付け加えておく。「一つの社会構成は、それが十分包容し得る生産力がすべて発展しきるまで、決して没落するものではない。新しい高度な生産関係の物質的存在条件が、古い社会の胎内で孵化され終わらなければ、新しい高度な生産関係が旧来のものにとって代わることは、決してない。」(Karl Marx [1859] S.9.)

(5) 小泉 [1968] に多く含まれている。

(6) 他の学術文献ではあまり示されることがないだろうから、本稿ではいくつか取り上げてみたい。

「この宋の解剖医は、／『どうも大原理と実際の人体内部のすがたはちがうようだ』／とおもったにちがいないが、しかしかれは大原理のほうへの忠誠心がつよく、自分の目で見たものを信じなかった。彼は自分の見たものを、大原理である陰陽五行説にあてはめ、例によって五臓六腑十二経絡の関係で説明した。このあたり、あたかもマルクス史観のひとつとがすべての歴史と現実をその大原理でみようとする、従順で愛すべき精神に似ている。／が、同じ漢方のながれを汲む山脇東洋はまったく違っていた。かれは漢方医でありながら、原理そのものに疑問をもった。」(司馬 [1976] 274 ページ。)

「唯物史観なりの分析や」「述語を使ってしまえば通過はできるが、理解はできない。」(司馬 [1993] 58 ページ。傍点は原文のまま。)

「唯物史観なりの分析や」「述語で片づけてしまうと、歴史がプラモデルのようになってしまう。」(同上、93 ページ。)

(7) 一点断りを入れておく。宗教また神等々に関する定義と把握は、様々であろう。以下は唯物論・唯物史観なりの神や宗教の捉え方であって、神や宗教とはそうしたものではないという反論は

おいておく。

(8) こうした視点は、かつての「社会主義」建設で大いに取り入れられたことであろう。それについてはここでは対象外としておく。

(9) マルクス経済学でいう、「相対的剰余価値上昇の理論」を想起してくればよい。詳細と原典は、K.Marx [1867-90] Vierter Abschnitt. 資本論翻訳委員会 [1983]「第3分冊」第4篇。

(10) 日本で例えてみれば、かつて武士は朝廷の奴隷のような存在であった。その奴隷・奴隷主という生産関係は様々な軋轢・対立・矛盾があったことであろう。そこから脱皮して武士の世を作りたいた平清盛政権、または関東に独立的な支配政権を築きたい平将門の政権、あるいは源頼朝から起こる鎌倉幕府による武士政権、これらの意向は以上のように理解できるわけあり、またそれを可能にした前提にして基礎的な条件は、本文のように捉えることができる。

(11) 奴隷制や封建制下における必要労働量と剰余労働の比率の計測は、本論文では対象外とせざるを得ないが、日本の資本主義制度（戦後、高度成長期以降）のものは、いくつかのデータが示されている。一例として、深澤 [2012] を参照。

(12) これらの詳細な分析として、深澤 [2012] を参照。また近年のものとして、泉 [2014] を参照。

(13) [http://matsuo-tadasu.ptu.jp/yougo\\_fmt.html](http://matsuo-tadasu.ptu.jp/yougo_fmt.html)。

#### 参考文献

泉弘志 [2014]『投下労働量計算と基本経済指標』大月書店。

経済学辞典編集委員会編者 [1979]『大月経済学事典』大月書店。

小泉信三 [1968]『小泉信三全集 第四巻』文藝春秋。

向坂逸郎編者代表 [1958]『マルクスの批判と反批判』（マルクス・エンゲルス選集 第16巻）新潮社。

司馬遼太郎 [1976]『花神』（上）新潮社。（初出

は1972年。)

—— [1993]『この国のかたち』(一) 文藝春秋。

(初出は1990年。)

城塚登監修・倫理社会研究会編集 [1979]『資料全集 倫理・社会』令文社。

深澤竜人 [2012]「投下労働量分析の発展と展開」  
“The Application and Evolution of the Labor Embodied Analysis.” (明治大学大学院政治経済学研究科 2011年度博士学位請求論文) 明治大学図書館。

Karl Marx, Friedrich Engels [1845-46] *Die deutsche Ideologie*, in *Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, Band 3, Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Berlin, Dietz Verlag, 1958. カール・マルクス、フリードリッヒ・エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』(大内兵衛・細川嘉六監訳 [1963]『マルクス=エンゲルス全集』第3巻、大月書店)。真下信一訳 [1965]『〔新訳〕ドイツ・イデオロギー』大月書店。

—— [1848] *Manifest der Kommunistischen Partei*, *id.*, Band 4, 1959. カール・マルクス、フリードリッヒ・エンゲルス『共産党宣言』(同上 [1960]『マルクス=エンゲルス全集』第4巻、大月書店)。マルクス-レーニン主義研究所訳 [1952]『共産党宣言 共産主義の原理』大月書店。

Karl Marx [1859] *Zur Kritik der politischen Ökonomie*, *id.*, Band 13, 1961. カール・マルクス『経済学批判』(同上 [1964]『マルクス=エンゲルス全集』第13巻)。

—— [1867-1890] *Das Kapital, Kritik der politischen Ökonomie*, *id.*, Band 23-25, 1962~1964. 資本論翻訳委員会訳 [1982-1989]『資本論』新日本出版社。

Max Weber [1920] *Die protestantische Ethik und der »Geist« des Kapitalismus, Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, Bd. 1, 1920, SS. 17-206. 大塚久雄訳 [1989]『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩

波書店。

Walt Rostow [1960] *The Stages of Economic Growth: A Non-Communist Manifesto*, London, The Cambridge University Press. 木村健康・久保まち子・村上泰亮訳 [1961]『経済成長の諸段階—一つの非共産主義宣言—』ダイヤモンド社。